

うらぎりのにわで

羽澄

曾孫の誕生を電話で告げられるなり、エリアス・ベツカ―は出かける支度を始めた。夜の冷えこみは身体に障るといふ老妻の言葉も聞かず、彼は愛車のエンジンをかけ、まっすぐに隣の街に住んでいる孫夫婦の家へと向かった。後部座席には、かねてから用意しておいた青い薔薇の花輪が積まれている。孫のアガーテに妊娠を告げられたときから丹精こめて育てた花で作ったものだ。

曾孫はアガーテ似だろうか。それとも旦那似だろうか。性別は尋ねなかった。男でも女でも、何よりも幸せに育ってくれさえすればいいと願っていたからだ。調子はずれの古い軍歌を口ずさみながら、彼はふと車が公道から外れていることに気づく。曾孫に思いを馳せるあまりぼんやりしすぎたようだ。老妻が業者に無理を言っ取りつけさせたナビから、若い女性の声で危険を告げる文言が響いた——途端に熱くなる。すっかり老いた現在でも、危険と名のつくものに対してはいくばくかの思いがあったのだ。

先の大戦について多少の知識のある者なら、エリアス、いやベツカー大尉の名を聞いたことがあるかもしれない。彼はスツーカー<sup>JU-87</sup>乗りであった。しかもただの軍人ではなく、相当の戦果を上げ、最末期にはあの髭の伍長から勲章を賜ったエリートである。潜り抜けてきた死線は人の倍以上だという自負があった。

だが次の瞬間、彼は物凄い勢いでブレーキを踏んだ。間一髪であった。闇に紛れてわからなかったが、進行方向には湖が黒々と口を開けて待っていたのだ。警告を無視して突き進んでいたら今頃天国へ直行しているところだった。若い頃、過信は命取りだと身をもって知ったのに。そう思いつつ顔をしかめる。いつも持ち歩いているシェークスピアの文庫本が、衝撃で車床へ落ちてしまっていたのだ。腕を伸ばし拾い上げ、顔を上げて——息を呑んだ。月光が照らし出す畔<sup>ほとり</sup>、一人の女性が薔薇の花輪を、無造作に湖へ投げ入れている。遠目にも見事な薔薇であることは容易に知れた。薔薇を育てる難しさをよく知っている彼にとつては、到底黙って見過ごせる行為ではない。車から降りる。しかし声をかけた女性が顔を向けた瞬間、眩暈を覚えた。



婚約者の死を知ったのは戦場だった。矢次早に届けられる薄い青みがかつた便箋には、流行病に罹患した彼女の容態が日ごとに悪化していく様が克明に記されていたから、彼は遠く離れた故郷へ残してきた、あの可憐な白百合のことをいっだって考えざるをえないのだった。落ち着きを失くした姿が不審に映つたのだろう。彼女の死を告げる手紙を受け取った翌日、彼は上官に呼び出され、事情を打ち明けるなり二週間の休暇を言い渡された。もう少し時代が下つたならあり得ない話だったろう。しかし当時、鉤十字の軍は北へ南へ、東へ西へ周囲の国を黒で塗りつぶしつつ連戦連勝をつづけていた。数年後、眠れる大鯨が割れた真珠を片手に参戦してくることも知らず。

帰郷までに、彼は何本もの列車を乗り継いだ。車中にあつたのは六日という長期である。向かう先は、欧州でも特に厳しい山間部に忘れ去られたように存在する故郷、ケレ。山頂に位置するこの集落には産業など存在せず、若者はほとんど麓の街へ出ていってしまい寂れ果てているが、ただ、

美しい自然だけがいつまでも変わらず横たわっている。

一年前、自分が発つてからも、ケレの白百合は健気に咲いているだろうか。そしてエリザベトは。白百合が大好きだった婚約者・エリザベトに会いたい、顔が見たい。横を走る捕虜輸送用の列車が過積載に悲鳴を上げているのを横目に、車中の彼はそんなことを考えつづけていた。

八本目の列車を終点で降り、二日に一度しか来ないケレ行きバスに乗り、目的地へたどりついた彼は、ある少女のもとを訪ねる。

——エリザベトにさよならしに来たの？

手紙の差出人・フランチスカ——エリザベトの妹である——は振り向きもせず、舌足らずな調子でそう言った。一面に広がる薔薇園。秋を迎え、華やかに咲き誇っていた。見れば、彼女は花輪を作っている。ある程度の数になると麓の街へ花輪を売りにゆくのは、彼もよく知るところにあつた。産業のないケレにおいては、花輪作りは少女の遊びではなく、貴重な生業なのだ。

——ああ。その、どうだったんだ？エリザベトは。

言いながら彼は、自分が間抜けな問いを発してしまった

のをひしひしと感じていた。どうしたもこうしたもなく、エリザベトは死んでしまった。遠く離れた戦地に居たばかりに、看取ってやることすらできなかつたのに。

——知らないわそんなこと。

フランチスカは鼻で笑った。彼女にとっては彼との問答よりも花輪を作る方が、明日の食い扶持を確保する方が重要なようで、ほっそりとした指は時折棘を避けきれず血を流しながらも、のべつまくなしに動いている。

——姉様のことは早く忘れるべきよ。

その言葉に彼はたちまち顔を上げ、目の前でこれ見よがしに忙しくしている義妹を睨みつけた。

——忘れられるもんか。エリザベトは俺の婚約者だったんだから。

一瞬、手を止めた義妹だったが、呆れたように笑みを零すと、傷ついた指を庇いながら、ほどなくしてまた花輪を作りはじめる。彼は疑問を抱いた。なぜ彼女は姉が死んだにも関わらず、ここまで平然と振舞えるのだろうか。自分が発つ前は、ケレ一番の仲睦まじい姉妹と言われていたのに！ そうか。フランチスカは、自分が姉の死に際に間に

合わなかつたのを責めているのだ！ それなら。悪しざまに罵ってくれた方がましだ。許しを乞うこともできたらうに。得られるかそうでないかは別として、区切りをつけることはできる。彼はそれを身勝手な思いだとよくよく承知していたのが、耐えきれず心の中に吐き出していた。フランチスカは姉を忘れろと言いながら、実際は忘れるなど言っている。

ああ、忘れるつもりは毛頭ない。数多の命を奪ってきた身だが、そこまでの冷血鬼には、とても。いつだって心はエリザベトのことを気にかけていた、それなのに。この痛みを抱えたまま、いつ死ぬかわからない戦地へ戻れと言うのか。

——エリザベトは薔薇よりも白百合の方が好きだった。

——死んだ女の話なんかしないで。

——なんてことを言うんだ、フランチスカ。君はそんな女だったのか。

——ええそうよ、エリアス。

そこではじめて振り向いた義妹の姿に、彼は思わず目を見開く。指から血が垂れていた。幼い頃から暇さえあれば

花輪を作っていた彼女なら、そんなミスを犯すはずがない……普通の状態であれば。

ああ、彼女は、冷静になってみれば至極当然だったが、姉の死に傷つき、心乱されているのだ。彼は声を荒げたのを後悔した。フランチスカだつて普通の少女である。平然と振舞っているように見えたのも、彼女なりの悲しみの表れだったのかもしれない。何も泣きわめくことだけが追悼だというわけでもなし。

そもそも自分はフランチスカを十分に知っていると言えるだろうか。こちらを睨む彼女を見れば、ずっと緑色だと思っていた瞳は青色だった。今となつては深い悲しみを湛えているように見える。ああ、自分は瞳の色すら思いこんでいたのだ。本当の姿をよく見ようとせず！ 謝罪しようとする彼を制するように、彼女は花輪を天に掲げつづやいた。

——姉様をね、眠らせてあげるの。貴方と出会った湖に。

——土葬にしないのか。

——しないわ。冷たい土の下に姉様を置いとくなんてできやしない。

ぼたぼたと紅が飛び散る。

——明日、姉様の葬式だから、せめて、うんと飾り付けてあげるの。

——エリザベトの顔が見たい。

ずっと思っていたことだった。いったんは押しとどめられていたのだが、彼の視線はもはやフランチスカにはなく、薔薇園の向こうにある、姉妹の住んでいる小屋に注がれていた。きっとそこに棺があるに違いない。

——醜いよ。疱瘡が全身に広がって。

——それでもいい。

——蠅がわいているわ。始末を頼んだのだけれど。

——どけ。

——渡さないわ。

思ったよりも強い力で、彼は地面へ突き飛ばされた。顔を上げれば、そこには冷たく見下ろすフランチスカが居る。

——姉様には会わせてあげない。そうしたら貴方、姉様の方へ行ってしまうでしょう。

——当たり前だ。俺はエリザベトを愛している。

途端に、なぜだろう、フランチスカはぱつと満足げな微

笑みを浮かべた。しばし彼は当惑したように目をしばたかせたが、けつして見間違ひなどではなかった。

——いいえ、エリアス。そういう意味じゃあないわ。貴方、姉様のあとを追うつもりでしょう……。

ふわり、と薔薇の芳香に包まれる。フランチスカが地面に跪いた彼をそつと抱きしめたのだ。

——貴方を神様のもとへは行かせない。

そこで彼女は、なんとむしやぶりつくようなキスを施してきたのだ。舌と舌が絡みあう感覚に、彼は一瞬呆然としていたが、状況を把握した途端、何をする、と叫び、たおやかな肢体を突き飛ばした。見れば、衝撃で口のどこかを切ってしまったらしく、少女の小さな唇からは紅が垂れていた。

——うれしいわ。

そうつぶやいてうつそりと笑う彼女に、憐れみよりも嫌悪感が先に立ち——彼は一度も振り返らず、薔薇園から逃げ去った。



フランチスカがこのような——全く理解しがたく、汚らしい行為に及んだのは、はじめてではない。

戦地へ発つ一週間前、今からちょうど一年前、姉妹の家を訪れた際、彼は花輪を抱えたフランチスカに、無理矢理、熱烈なキスをされていた。婚約者が居る自分になんてことを、しかもその婚約相手は姉・エリザベト、からかうにしてもひどすぎる。憤る彼に、フランチスカは平気な顔で、

——大丈夫。姉様は鈍いからばれやしないわ。

——嘘つきになるつもりか。

——嘘つきなのは貴方よ、エリアス。姉様じゃなくて、私が好きだったくせに。

それ以上彼は言い返せなかった。

凶星だったのだ。

腕利きの皮なめし職人の家に生まれたベルヴアルト姉妹。仲睦まじいことでも有名だったが、ケレ一番の美人姉妹としても知られていた。ただ口の悪い職人仲間などは裏ではこう陰口を叩いていた——本当の美人は妹のフランチスカだけであり、姉のエリザベトはいつも横に居るおかげで、多少美しく見えているだけなのだ、と。実際、彼も彼

女らと親しくなるまではそう思いこんでいた。容姿はうりふたつの姉妹だったが、父の家業を手伝い、つねに皮の臭いをただよわせているエリザベトと、花輪作りのおかげで、かぐわしい香りに包まれているフランチスカ。どちらも美しい娘であったが、幼い時分には、彼の心は真面目なエリザベトよりも機知に富んで明るい性格のフランチスカの方へ傾いていた。

認識が変わったのは、彼の両親が山崩れで行方不明となり、ついで皮なめし職人であった姉妹の父が元々悪かった肺を患って亡くなってからだった。

両親を失い途方に暮れた彼を救ったのは、幼い頃から家事を担当してきたエリザベトだった。

ベルヴァルトの家には、昔から姉妹の母となるべき人物が居ない。夫の行きすぎた職人氣質に愛想を尽かし、麓へ下りていったのだと聞いている。

自らも父を失ってつらいだろうに、何かと気にかけてくれるエリザベトの献身的な姿勢に、彼が徐々に惹かれていったのは自然な流れだった。

それなのに……なぜフランチスカはキスを？

——私、エリアスのことが好きだったの。今もそうよ。ぞつとするくらい澄んだ緑色の瞳に見つめられ、どくんと心臓が跳ねたのをおぼえている。

——ねえ、良いでしょう？

再び近づいてくる形の良い唇を、彼は拒否できなかった。舐めるように、削り取るように、絡みついてくる舌。

全てが裏切りに満ちていた。

——エリアスは？ エリアスは私のこと、好き？

まっすぐな瞳で問いかけられ、硬直した彼を、

——エリアス？ エリアス、どこに居るの？

人を疑うことを知らない純真無垢な少女の声が貫いた。やつと我に返り、フランチスカから距離を取る。

——返事を聞かせてね。

と、フランチスカは囁き、直後、姿を現した姉にいつも通りの人懐こい笑みを見せ、何食わぬ様子で駆け寄った。

結局、彼は返事をしなかった。逃げるように故郷を離れ、そのまま戦地へ向かう列車へ乗りこんだのだ。



あんなことがあったのに、数日後、呼び出された彼が素直にベルヴアルトの家に向かったのは、婚約者を看取れなかったという負い目があったからに違いない。

——また、行ってしまうのね。

——そう、なるな。

背を向けたフランチスカは、床に座って皮をなめしていた。器用な彼女は、以前から経験があったかのように手慣れた様子で作業をこなしている。

——ここよりもっとあたたかい国へ、爆弾を落とすに。

——ああ。

——さぞかし綺麗な街なのでしょうね。珍しい花が咲いているかしら。

——きつとな。

ふと皮を加工していた手が止まる。

——姉様のためにケレへ青い薔薇を持って帰ってほしいの。私、花輪を湖に沈めて、姉様に届けるから……。

青い薔薇。花言葉は「不可能・ありえない」。存在しないものの例としてよく持ち出される代表的な花。意図を一瞬疑った彼だったが、義妹の頬にまだ新しい涙の痕が残って

いるのを見て、考えを打ち消した。

また自分は不誠実なことを考えている。彼女は自分さえ絡まなければ、姉思いの善良な娘なのに。

——ああ、でも薔薇が青いなんてことあるかしら。

——実現する頃には、俺もお前も生きちゃいないよ。

そもそも前提を疑いはじめた彼女に、思わず苦笑していた。同時に情勢に疎い、無邪気すぎるその感覚にも。

辺境のケレには無縁な話かもしれないが、今こうしている間にも、終わってゆく命は数多ある。ケレの住民が情勢に疎いことは麓の街でも有名だ。麓の学校で教師をしていた父親に倣い、新聞を読む習慣があった彼ですら、軍に入ってから物知らずぶりを何度も戦友たちに笑われた。その物知らずたちの中でも、ベルヴアルト姉妹は生まれてこのかたケレから出たことのない、きわめつけの天然記念物なのだった。

——貴方は、いつまでも死なせないわ。

笑いを堪えきれない彼に対し、フランチスカは静かにそう言い放った。

——だがどうして青い薔薇なんだ？

——青い薔薇が欲しいって。姉様が言っていたこと思い出したからよ。

——俺は、エリザベトは百合が好きなものと思っていた。  
——エリアス、貴方、姉様のこと何にも知らないのね。  
ほう、とため息をついてから、フランチスカは遠い目をつぶやいた。

——姉様はね、身体を悪くする前から、気づいていたわ。  
——何に。

——私たちの関係。

彼は驚愕していた。エリザベトが、あの日のキスに、ばれやしないと嘲笑したフランチスカに——二度目を拒否できなかった情けない自分に。気づいていた？

——フランチスカ、まさか、エリザベトに言ったんじや、  
——舐めないで。それくらい鈍くたって、わかるわよ。

振り返ったフランチスカはたいそう腹を立てているようだ。彼は一瞬、混乱した。あの日、姉は鈍いから大丈夫と笑った少女と同一人物とはとも思えないくらい、目の前の彼女は敵めしい表情を浮かべていたのだ。青い瞳が責めるように彼を射ぬいている。

——ねえ、どうして私にキスなんかしたの？  
——そ、それは。

——言えないの？ だったら責任を取ってここに居てくれなきゃ厭よ。

——道理の通らないことを言うな！

大きな声を出すと、途端にフランチスカはしよげたような表情を浮かべてうつむいた。気づいたときにはもう遅く、また背を向けて皮をなめしはじめている。

——結局また誰かを殺しに行ってしまうの？

——命令だからな。

——ひどい人。きつと神様のもとへは行けないわ。

なおも言いつのる彼女を無視し、彼は本棚を物色した。知識人だったベルヴアルト姉妹の母が遺したもので、なかなか良い書物が揃っている。

——一冊、詩集を貸してくれないか。あつちで読みたい。戦地

——詩集と言わず古典を持っていきなさいよ。

フランチスカは本棚から一冊の文庫本を取り出した。

——シエークスパーアは好き？

——英国人ライミーの戯曲は冗長にすぎる。

——そうおっしゃらないで。これは『オセロー』。嫉妬に狂った男の話よ。とても面白いの。

——へえ。そんなに。

——嘘。つまらない話よ。嫉妬なんてつまらない。

——酷い奴だ。騙そうとしたのか。

——私は嫉妬したことなんてないから。

——またそれも嘘だつて言うんだろう。

——嘘。

——ほら見たことか。

——嘘。

——なんて女だ。

——もう行くの？

——ああ。

——青い薔薇を忘れないで。約束よ。



数年後、戦争は終わった。収容所へ入れられたエリアスだったが、それからまた数年経った後、彼はめでたく解放

され、帰郷するため列車を乗り継ぎ、例のバスに乗った。ケレは空襲を受けなかったようだが、終戦直前に起きた山崩れによって集落全体が流され壊滅してしまつたらしい。乗り合わせた軍医上がりのゲオルクがそう教えてくれた。問題はそれからである。

彼は元々麓の街で開業医をやっていたらしい。だからエリアスは彼なら婚約者の最期の様子を知っているに違いないと尋ねたのだが——なんとゲオルクは、ケレで流行り病にかかった人物など、そもそもエリザベトの死亡届すら出されていないと、告げたのだ。

エリザベトが生きている？ ……信じられないと思つた彼だったが、ゲオルクの真剣な表情からして嘘を言っているとは、とても思えない。ではあのとき会つたフランチスカは誰だつたのか？ 青い薔薇を求めた彼女は……。

——降ろしてくれ！

急に叫んだ彼に、運転手は首を傾げたが、要求通り、彼を予定より一つ先の麓のバス停で降ろした。そうして彼は二度と故郷・ケレへ戻らず、麓で花屋を営み、数年後、妻を娶つて、子宝にも恵まれ、幸せな余生をすごしていた。

……はずだった。

——やっと来てくれたのね、エリアス。待っていたのよ。

湖の畔で一人、ひたすら花輪を投げ入れていた女性は微笑み、悲鳴を上げて逃げようとするエリアスへ、物凄い勢いで迫ってきた。

——ずっと、ずっと、待っていたの……。

必死に振り払おうとぼたつかせた彼の手が、彼女が纏っていた薄いマントのようなものを、うっかり叩き落す——  
ずいぶん前に、本来のサイズとは合わなくなっていたらしい。ずるり、と音を立てて地面に落ちた。

「……………!!」

月光に照らし出され、痩せ細り、腰の曲がった肢体があらわになる。

爛熟しすぎた肉の臭いが、一面に広がった。

(終)

月刊缶じうす十月号 通巻201号

2014年9月29日発行

編集人 渡科由太 ねこまる 蛸

印刷所 広島大学 文団BOX